論文要旨

小学校外国語活動は、2002 年度、文部科学省が『総合的な学習の時間』を設けるに伴って国際理解教育の一環として行なわれるようになった。2008 年 1 月、学習指導要領改訂が行われ、外国語活動の位置づけがより明確になり、高学年に対して年間 35 時間の必須化を義務付けた。外国語活動の目的は、“外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う” である。しかし、現時点では、どのような要因が外国への理解を深め、積極的なコミュニケーション能力の素地を養うかについて明らかになっておらず、多くの報告は実践的であり実証研究は数少ない。小学校外国語活動は、2011 年度から導入されるので実証研究の蓄積は急務である。これらを踏まえ、本論では、児童の動機づけや情意要因に関して、実証研究の蓄積に貢献する。

本論文は、次のような 9 章から構成されている。まず、第 1 章では、本研究を実施することに至った背景情報を外観する。国内外の早期英語教育の流れと文部科学省が提示する外国語活動の位置づけを明確にする。

第 2 章では、文献調査を行う。特に、動機づけ、情意要因、児童に関する先行研究を纏め、今後どのような研究が必要であるのかを明らかにしている。1960 年以降の、第二言語習得（SLA）の分野における個人差要因の研究の流れについて概観する。また、数多くある個人差要因の中から小学児童が外国語を学習する上で関わりがあり、重要であると考えられる要因を選定し、定義づけ、動機やその他の要因に関しての研究を概観している。文部科学省の示す小学校英語活動の目的は、英語力の発達を促すものではなく、英語に慣れ親しむこと、学習に対する動機づけ（学習意欲や態度）を育てるである。つまり動機づけや動機づけに関わると考えられるその他の要因、即ち、コミュニケーションへの積極性、異文化への関心を検証することは文部科学省の方針でもあるのでそれに関わる要因を検討することは妥当であるといえよう。文献調査を行った結果、国内の児童の個人差要因に関する実証研究は数少なく、その中でも横断的研究がほとんどで、縦断

的調査を行った研究はない。横断的研究を蓄積し、縦断的調査を行うことは、今後、外国語活動を行っていくうえで重要であることがわかった。

これらの問題点を踏まえ、本論の目的を以下の通りとする。

(1) 小学校外国語活動において、個人差要因の視点から、年齢差・性差に関する児童の動機づけ、異文化への関心、不安についての実態を探り (Study 1)、動機づけ、WTC、異文化への関心を高める上で、情意要因や社会的要素がどのように関係するのか (Study 2) 、要因間の検討を行う。

(2) 教育的介入(プロジェクト型授業実践) を縦断的に実施することで児童の動機づけはどのように変化するのか、その変化の起こるプロセスを探り (Study 3)、変化の起こるプロセスをより微視的に見る (Study 4)。

以上の目的を明らかにするために、4 つの実証研究を行っている。第 3 章では、4 つの実証研究を述べる前に、調査を行った公立小学校と小学校を取り巻く環境について述べている。研究対象の小学校は大阪府内に位置する、公立小学校である。筆者は、本校では、実践を行う中心的役割を果たしており、同時に、本論の研究も行っていた。

第 4 章から第 8 章までは、予備調査と 4 つの実証研究について述べている。第 4 章 (Preliminary Study) では、461 名の児童を対象に、予備調査を行い、中・高学年の小学児童を対象とした 動機、関心、不安の 項目の精査を行うことを目的とした。結果として 15 項目が抽出され、その項目を使用して、次調査を実施している。

第 5 章では、小学校英語活動では、基礎データが数少ないことから、小学児童における動機、異文化への関心、不安に関する実態を、年齢差、性差ではどのように異なるのかを探ることを目的とした。Preliminary Study のデータを分析し、多変量分散分析を行ない、動機、異文化への

関心、不安に関する年齢差・性差の傾向を明らかにした。結果として、学年があがるにつれて、動機、異文化への関心が低下していった。 性差比較では、女子生徒のほうが、男子生徒と比較して、動機、異文化への関心、不安が高いことが示された。

第6章では、小学校外国語活動において、文部科学省が目的とする異文化への関心を深め、コミュニケーションへの積極性(WTC)を高めることがどのような個人差要因や社会的要因（グループダイナミクス）と繋がるのかの検討を行うことを目的として、493名の児童を対象に調査を行った。共分散構造分析の結果、動機づけが、外国への関心に影響し、自信は動機づけへも影響していることの示唆を得た。 CANDO（できるという気持ち)が、コミュニケーション意欲に影響すると示された。自信を持たせることによりコミュニケーション意欲に影響力があると示された。 更に、児童の自由記述をもとに内容分析している。

第7章、第8章では、プロジェクト型授業実践（ミュージカルプロジェクト)の教育的介入を縦断的に行うことで、児童の動機がどのように変化するのかを探り、そのプロセスを明らかにすることを目的とした。歌を歌うのが好きで、劇をするのが好きな5年生 の児童たちがミュージカルプロジェクトに取り組んだ。

第7章では、ミュージカルの教育的介入により、児童の3欲求（自律性・有能性・関係性）を充足し、内発的動機づけと WTC を高めることはできるのか、また、その学習過程において、教師と児童がどのようなクラスルームインターアククションを行い、それがどのように変化するのかを調査している。また、その変化の起こるプロセスを探っている。より教育現場に根差した研究を行うことで、児童の動機づけの変化とプロセスを明らかにしようと試みた。結果として、ミュージカルの事後には、内発的動機づけ、有能性、自律性、WTC に変化が見られ、t検定でも、有能性、自律性の事後調査において統計的有意差を認めた。 共分散構造分析（事後）では、自律性、有能性から内発的動機づけへのパス係数が有意であった。自律性、有能性が、内発的動機づけへと繋がることが示された。動機づけのプロセスを見るために、クラスでの全練習をビデオ撮りし、データを文字起こしした。クラスルームでの談話をオープンコード化し、類似している概念をグループ化し、インターアクションパターンを示す 5 つの高次カテゴリーへと抽象化

した。結果として、5 つの高次カテゴリーが抽象化され、Modeling and Repetition Pair, Group-Focused Scaffoldings, Individual-Focused Scaffoldings, Praise and Language Achievement の連続体で示された。クラスでの練習で、どのように教師と生徒のインターアクションが行われているかを 質的分析の結果に基づき概略化した (Classroom Practice Cycles)。教師・生徒間のインターアクションはクラスでの活動内容や練習段階で異なるものの (例：導入時にはmodeling-repetition が多く見られる)、一貫性のある "Classroom Practice Cycles" が示された。 毎時間行われた英語活動では、教師・生徒がこのサイクルを行い、結果として、生徒がだんだんと語彙やセンテンスを言えるようになる姿が見られた。 新たな言語材料やタスクが導入されると、新たなサイクルが開始され、毎時間、このサイクルが観察された。

第 8 章 (Study 4) では、Study 3 で明らかになった変化の起こるプロセスを、談話分析を用いて、より微視的に見ることを目的としている。変化の起こるプロセスをより微視的に見ることでより具体的な動的変化を見ることができると考え、1 クラス (32 名) を対象に、縦断調査を行った。 コンテキストの中で発達を詳細にみるために、談話分析を社会文化論的アプローチ (scaffolding)の概念を用いて検討する 。教室内での変化の起こるプロセス (教師・生徒、生徒・生徒、教師・教師) の相互関係がどのように変化するのかを目的として談話分析を行い、プロセスの詳細を微視的にみている。 結果として、教師と生徒のインターアクションのビデオ分析から、教師の援助のもとに児童が徐々にひとりでダイアログを言えるようになることと、その発達を促す教師の役割が浮き彫りにされた。

第 9 章では、予備調査と 4 つの実証研究の研究分野への貢献と教育的示唆について述べている。研究分野への貢献としては、(1) 数少ない児童の SLA 研究分野において縦断的・横断的手法を用いて検証を行い、児童の個人差要因に関する検証と教育的介入による動機付けの変化を明らかにした。児童の SLA の研究分野に貢献したと言えよう。 (2) 動機づけの研究分野において、プロセスを検証している研究は数少ないので、動機づけ (自己決定理論) の研究分野 (Process Orientated)において貢献したといえる。 (3)プロジェクト型授業実践において、動機づけの変化とそのプロセスを明らかにした。プロジェクト型授業実践に関しては、実践報告が多かったので、

実証研究の蓄積に貢献したと言えよう。(4)リサーチデザインに量・質的研究を取り入れた。大規模調査では全体傾向を捉えることができ、質的調査では教室内で起こりうる詳細な検証を行ったので、動機づけの変化を多角的に見ることができたといえよう。教育的示唆としては、(1)学年や性差で動機などが異なるので、知的好奇心がもてるような活動を行うことや男子生徒を引き込むことが大切であろう。(2) 児童にとっては、できるという感覚、楽しいという気持ち、よいクラスの雰囲気が、異文化への関心やコミュニケーションへの積極性と関わるので、指導にあたる教員らは、よいクラスの雰囲気を維持・喚起しつつ、児童らが“できる”“楽しい”という気持ちを維持できるよう指導にあたることが大切であろう。(3) プロジェクト介入の結果、児童の動機づけが高まるとの示唆を得ている。プロジェクトを試みることは教員にとって負担は大きいが、動機付けを高めるという視点から、年間数時間を利用してプロジェクトを行うこともよいであろう。(4) ティームティーチングにおいては、言語専門家は担任を支援しつつ自立させていくような役割を担い、また担任はクラスルームコントロールなどで言語専門家を支援し、互いが支援しあい協力することでよりよい活動を行っていくこととよいであろう。最後に、本研究の限界点と、今後の研究の方向性を提案している。